

# 『平家物語』語り本の形成

—— 卷九を中心に ——

原 はら  
田 だ  
敦 あつ  
史 し

一

屋代本『平家物語』卷十に、次のような一節がある。

三位中将モ通フ心ナレハ、都ニサコソ我ヲ無<sub>レ</sub>覚東<sub>一</sub>思ラメ、頸共ノ中ニハ見ストモ、水ノ底ニモ沈ミヤシヌラントテコソ歎ラメ、未此世ニ長ラヘタルソト知セハヤトハ思ヘトモ、忍タル棲<sub>レ</sub>ヲ人ニ知センモサスカナレハトテ、啼々明シ暮サセ給ケリ。夜ニ成レハ、余三兵衛重景、石童丸ナト云者ヲ喬ニメシ、「都ニハ只今、我事ヲコソ思出ラメ。少キ者共忘ルトモ、人ハ忘隙アラシ、角独<sub>リ</sub>只イツトナク明シ暮セハ慰ム方ハ無レトモ、越前三位上ヲ見ニハ、賢クソ少キ者共ヲ都ニ留置タリケル」トテ、泣々悦給ケリ。北方ハ、商人ノ便ニ文ナトノ自ラ通ニモ、「ナト今マテ迎ヘ取セ給ハヌソヤ。疾シテ迎ヘ取セ給ヘ。少キ者共モ不<sub>レ</sub>斜恋シカリ奉リ、我モ尽セヌ物思ニ長ラウヘキ様モナシ」ナント細々ト書ツ、ケ給ケレハ、三位中将此御返事見給テモ、何事モ思入給ハス、臥沈ミテソ歎カレケル。大臣殿モ二位殿モ聞<sub>レ</sub>之給テ、「サラハ北方、少キ人々ヲ奉<sub>レ</sub>迎取、一所ニテ何ニモ成給ヘカシ」ト宣ヘトモ、「我

身コソアラメ、人ノタメ糸惜ケレハ」トテ、泣々月日ヲ被<sub>レ</sub>送ケルソ、セメテノ志<sub>サシ</sub>ノ程モ顕レケル。<sup>①</sup>

都に隠れ住んでいた平維盛の妻子のもとに、一の谷における平家の敗戦の報が届く。彼らは維盛の身を案じて悲しみに沈んだが、維盛もまた、都の妻子を思いやっていた。引用したのは、彼らの心中を描いて、巻十における維盛の物語の始発となる重要な場面であるが、前後も含めた屋代本の一連の記述には多くの矛盾や不自然な点があり、それらが先行本文を改編したことによって生じたものであると、かつて考えたことがある<sup>②</sup>。そこではその先行本文を、現存読み本系諸本を通じて想定した。屋代本の記述は、読み本系諸本の中に散在する記述を断片的に切り取って集めたようにして成り立っている。この旧稿の考察を踏まえた上で、新たな問題を見出すために、右の傍線部と波線部に注目したい。

同じ語り本系諸本において、傍線部は八坂系の中院本などに、波線部は覚一本（ただし巻九の一の谷合戦以前）に見出すことができる。これらに該当する記述は、いずれも現存読み本系『平家物語』諸本の中に存する。だが、それは一種ではなく、複数の本文にわたって求めなければならない。傍線部は四部合戦状態、波線部は延慶本の、それぞれ巻九の中にある。後の論述とも関わるので、その前後の覚一本（屋代本は巻九欠巻）・四部本・延慶本の記事配列を、表にして示しておく。

表1

覚一本		四部本	延慶本
1	平家、一の谷に築城 六ヶ度軍	① 平家、一の谷に築城 ② 維盛都を思う	(1) 義経へ三種神器奪還命令 平家一の谷に築城
2	義経へ三種神器奪還命令	③ 二位僧都全親、梶井宮と音信 六ヶ度軍	(2) 六ヶ度軍
3	福原で仏事、除目	④ 福原で仏事、除目	(3) 福原で仏事、除目
4	二位僧都全親、梶井宮と音信	⑤ 三位僧都全親、梶井宮と音信	(4) 二位僧都全親、梶井宮と音信
5	維盛都を思う	⑥ 三草合戦	(5) 維盛、都を思う
6	三草合戦	⑦ 教経山の手へ	(6) 梶原、勝尾寺を焼く
7	教経山の手へ	⑧ 源平遠火	(7) 法皇、毘沙門天像を作成
8			(8)

9	通盛と小宰相の逢瀬	⑨	通盛と小宰相の逢瀬	(9)	三草合戦
10	源平遠火	⑩	平家の陣に鹿が落ちる	(10)	教経山の手へ
11	義経進軍	⑪	義経進軍	(11)	源平遠火
				(12)	通盛と小宰相の逢瀬
				(13)	義経進軍

先の傍線部に該当する記述は、四部本では②に含まれる。

平家、都へ返り入るべしと聞こえければ、余党の都に残り留まりしも、式代の文をぞ遣はしける。権亮三位中将も、自づから福原の商人の便りに、君達の御許へ消息を奉りたまふ。其の便りにぞ、亦御返事も有りける。維盛、御文に細々と書ばし留めたまふ。奥に、

合はん事は何を渚の浜千鳥波の立居に音をのみぞ泣く

北の方も御返事に御文に細々と書ばし留めたまふ。奥に、

身は此に心は其れに在明けの尽きぬ思ひを我如何にせん

此三位中将は、白地にも人と打語る事も為たまはず。夜にも成るに、余三兵衛重景・石童丸を近付けたまひて、「都にては寐寤もや為らん、我が事のみを云ひ出だすやらん。少き者共は忘るゝにも世も忘れじ者を」とて、涙を流して明かし暮らしたまふ。北の方も伝へ聞かせたまふ。「何かに一つ所に在して、何かならん人にも語らひて、胸呼みたまへかし」と有りけれども、佐も為たまはず。何かなる事も思ひ入り、伏し沈みたまへば、「此の三位中将は、池大納言の様に二心御す」とて、大臣殿も打解けたまはねば、「努々佐は思はぬ物を」とて、最度益無くぞ思はれける。

以後も隨時言及するが、本稿で問題にする範囲では、四部本の本文は南都本と近いことが多く、右の部分でも南都本が太線部を欠くかは概ね一致する。一方波線部は、延慶本(5)に

権亮三位中将ハ、年隔タリ日重ルニ随テ、古郷ニ留メ置シ人々ノ事ノミ無ニ穴倉恋クゾ被レ思ケル。商人ノ便ナドニ自ラ文ナムドノ通ニモ、北方ハ、「相構テ迎取給ヘ。少キ者共モナノメナラズ恋シガリ奉ル。ツキセヌ歎ニナガラウベクモナシ」ナムド、細々トカキツバケ給ヘルヲ見給ニ付テモ、「アワレ迎取奉テ、一所ニテトモカクモナラバ、思事アラジ」ト思立給事ヒマナケレドモ、人ノ為イトラシケレバ、思忍テ日ヲ送ル。サルマ、ニハ余三兵衛、石童丸ナムドヲ常ニアト枕ニ置キ給テ、曉テモ晩テモ、只此事ヲノミ宣テ、臥沈ミ給ヘバ、三位中将ノ有様ヲ人々見給テ、「池ノ大納言ノ様ニ頼朝ニ心ヲ通シテ、二心有」トテ、大臣殿モ打トケ給ハネバ、「ユメ／＼サハ無物ヲ」トテ、イトゞアヂキナクゾオボシメサレケル。「愛執増長、一切煩惱」ノ文ヲ思ニハ、穢土ヲ厭ニイサミナシ。閻浮愛執ノキヅナコハケレバ、浄土ヲ欣ニ倦シ。宿執開發ノ身ナレバ、今生ニハ妻子ヲ念フ心、合戦ニ向思ニ身ヲ苦メテ、来生ニハ修羅道ニ落ム事疑ナシ。只一門ニ不レ知レシテ都エ忍テ上テ、妻子ヲモ見、妄念ヲモ払テ、閑ニ臨終セムヨリ外ノ事有ベカラズ」ト思ナラレニケレバ、何事モ思入レ給ハズ、臥沈給フゾ哀ナル。<sup>4</sup>

とあるものである。延慶本と近い関係にある長門本にも見いだせる。右の二重傍線部もまた、屋代本・覚一本・中院本のいずれもが、卷十において、冒頭の引用部に続く箇所で、維盛の苦悩を語る中に用いている記述である。先行本文を切り貼りするようなこうした利用態度を旧稿では断章取義的と評したが、あらためて本稿で重視したいのは、語り本本文の由来を求めて複数の源に行き着いたという事実である。

語り本系『平家物語』の成立に関して、読み本系の本文、特に延慶本（的本文）との関係から考察されることは多い。ところが右の場合、現存する二種以上の本文を視野に入れなければ、説明はできないのである。もちろん、双方の特徴を兼備する本文が、かつては存在したのだという想定はあり得よう。だがこの場合は、それも難しい。四部本②と延慶本（5）の太字部分は、ほとんど同文であり、かつ四部本の網掛け部分は、延慶本では卷八にある

権亮三位中将ハ、月日ノ過行ケルマ、ニハ、明テモ晩テモ故郷ノ事ノミ恋ク覚ヘテ、只借ソメノ新枕ヲダニモ語ヒ給ワズ、余三兵衛重景、石童丸ナムド近ク御ソバニフセテ、北方、若君、姫君ノ事ヲノミ宣出テ、「イカナル有様ニテカ有ラム。誰アワレミ、誰

糸惜ト云ラム。我身ノ置所ダニモアラジニ、少者共引具テ、イカ計ノ事ヲカ思ラム。振捨テ、出シ心ツヨサモ猿事ニテ、忿ギ迎取ラムト誘置シ事モ、程経バ何ニウラメシク思ラム」ナムド宣ツゞケテハ、涙ヲノミ流シ給フゾ糸惜キ。

北方ハ此ノ有様ヲ伝聞バ、「只イカナラム人ヲモ語テ、心ヲモナグサメ給ヘカシ。サリトテモ、愚ニ不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>思物ヲ」ト、其サヘ心苦クオボシテ、常ハ引カツキテ臥給モ無慚也。

という叙述と、はつきりと重なっている。<sup>(5)</sup> これら全てを重複あるいは混在させた本文があったとは、考えにくいのではないか。

ここでは、四部本的な本文と延慶本的な本文は両立しないという考えに落ち着くのが自然だろう。ならば、語り本は二種以上の本文を参照しながら作られたと想定することは、その形成を考えるために有効な視座となるはずだ。無論、現存するいずれかの本文そのものが用いられたというつもりはない。あくまでも、語り本の淵源を窺うための窓口として現存諸本を用いるにすぎない。迂遠ながらもそのことを確認してきたのは、類似した例を他にも多数見出すことができるからである。語り本巻九の、一の谷合戦を描いた叙述の中には、四部本的本文と延慶本的本文の切り貼りのように見える箇所がいくつもある。全てには触れ得ないが、紙幅の範囲内で例示をしていきたい。語り本系では、屋代本は欠巻のため覚一本・中院本、および覚一本と屋代本の混態といわれる百二十句本を参照するが、特に断らない限りは覚一本で代表させる。また、前述のように四部本は南都本と近く、延慶本は長門本と多く重なる。<sup>(6)</sup> これらも随時参照するが、結論に影響しない引用は最小限にとどめる。

## 二

まずは表1の範囲内、一の谷開戦前までの叙述の中から、問題となる本文を掲げる。

### 〈覚一本1〉

平家はこぞの冬の比より、讃岐国八島の磯をいでて、摂津国難波潟へをしわたり、福原の旧都に居住して、西は一谷を城郭に構へ、

東は生田の森を大手の木戸口とぞさだめける。其内福原・兵庫・板屋・須磨にこもる勢、これは山陽道八ヶ国、南海道六ヶ国、都合十四ヶ国をうちしたがへてめさるゝところの軍兵也。十万余騎とぞ聞えし。一谷は北は山、南は海、口はせばくて奥ひろし。岸たかくして屏風をたてたるにことならず。北の山ぎはより南の海のとをあさまで、大石をかさねあげ、おほ木をきつてさかも木にひき、ふかきところには大船どもをそばだてて、かいだてにかき、城の面の高矢倉には、一人当千ときこゆる四国鎮西の兵共、甲冑弓箭を帶して、雲霞の如くになみ居たり。矢倉のしたには、鞍置馬共十重廿重にひつたてたり。つねに大鼓をうって乱声をす。一張の弓のいきおひは半月胸のまへにかゝり、三尺の劍の光は秋の霜腰の間に横だへたり。たかきところには赤旗おほくうちたてたれば、春風にふかれて天に翻るは、火炎のもえあがるにことならず。

右の傍線部に関して、四部本①に

木曾討たれぬと聞こえしかば、平家は讃岐国屋島の磯を出で、摂州難波潟へぞ渡しける。福原の旧都に返りて、西は一谷を木戸口と為、東は生田の森、湊河を木戸口と為けり。其の内福原、取麻、板宿、駒の林に籠るは、山陽道八ヶ国・南海道六ヶ国・已上十四ヶ国の勢十万余騎とぞ申しける。赤旗・赤駿を高き所に打立てたれば、春風に吹かれて天に翻る有様、猛火の燃え上がるに異ならず。

また、南都本の同箇所には

木曾既ニウタレスト聞ヘシカハ、八嶋ノ磯ヲ出テ摂津国難波潟ヘソ渡リ給フ。須磨・板屋戸・兵庫・室・高砂マテ其勢打烈キ、幾千万ト云数ヲ知ス。平家ハ去年幡磨ノ国室山、備中国水島、二ヶ度ノ合戦ヨリ度々ノ軍ニ打勝テ、山陽道八ヶ国、南海道六ヶ国、合テ十四ヶ国ノ住人、都合其勢十万余騎、去ル正月廿八日ヨリシテ摂津国福原ノ旧里ニツキ、一ノ谷ヲ城郷トシテ東ハ生田ノ森ヲ限リ、西ハ一谷ヲ木戸口トシテ其間三里カ程ニ楯籠ル。浦々ニハ数千艘ノ船ヲ浮テ充滿リ。高キ所ニハ赤旗イクラモ立テ並ヘタル

カ、春風ニソヒエテ天ニヒルカヘルコト猛火ノモユルニ異ス。<sup>7)</sup>

とある。延慶本<sup>(2)</sup>に

平家ハ幡摩国室山、備中国ニ水島、両度ノ合戦ニ打勝テ、山陽道七ヶ国、南海道六ヶ国、都合十三ヶ国ノ住人等悉ク従、軍兵十万余騎ニ及ベリ。「木曾被<sup>レ</sup>打ヌ」ト聞ケレバ、平家、讃岐屋島ヲコギ出ツ、摂津国ト幡摩トノ堺ナル難波一谷ト云所ニゾ籠リケル。去正月ヨリ、コ、ハ究竟ノ城ナリトテ、城墾ヲ構テ、先陳ハ生田ノ杜、湊河、福原ノ都ニ陳ヲ取。後陳ハ室、高砂、明石マデツ、キ、海上ニハ数千艘ノ舟ヲ浮テ、浦々島々ニ充滿シタリ。一谷ハ口ハ狭テ奥広シ。南ハ海、北ハ山、岸高シテ屏風ヲ立タルガ如シ。馬モ人モスコシモ通ベキ様ナカリケリ。誠ニユ、シキ城也。赤旗其数不<sup>レ</sup>知立並タリケレバ、春風ニ吹レテ天ニ飄リ、火焰ノ立アガルガ如シ。誠ニヲビタ、シ。敵モ憶シヌベクゾ見ヘケル。(長門本同)

とあるのと比較すれば、語り本の傍線部がおおよそいずれに由来するかは明らかである。ただし網掛け部分のように、わずかながら延慶本と重なる表現も見えている(二つ目の網掛け部については、中院本に「かたきもこれを見ては、をくしぬへくそ見えたりける」<sup>(8)</sup>とある)。

次いで波線部を見る。今まさに戦いが始まろうとしているかのような緊迫感があるが、源氏が迫ってきているわけでもない状況において、違和感のない叙述だとはいえない。これが四部本では、まさに一の谷の戦闘が始まろうとする間際、表1の範囲より後の、いわゆる熊谷・平山の「一二の懸」の中にあるのである。単独行動によって平家の城戸口に到達した熊谷父子が見た、敵の陣容の描写である。

平家方の城を掟めたる様、山の際より海の遠浅まで、大石を取り積みて、上に逆木樹を引き塞ぎ、其の中に高矢倉を昇きて、矢倉の前に雲霞の如く勢共並み居たり。矢倉の下には、郎等・眷属、甲の緒を止め、重なり居たり。後ろには鞍置き馬、十重廿重に引き立て、海深き所には大船を峙て、昇楯と為。何かに為ても破るべき様も見えざりけり。(南都本類同)

延慶本の同箇所には

城塙ノ構様、誠ニオビタ、シ。陸ニハ山ノ麓マデ大木ヲ切伏テ、其影ニ数万騎ノ勢並居タリ。渚ニハ山ノ麓ヨリ海ノ遠浅マデ大石ヲタ、ミテ乱杭ヲ打、大船数ヲ不<sub>レ</sub>知立置タリ。其影ニ数万疋ノ馬共、十重廿重ニ引立タリ。其後ニハ赤旗数ヲ不<sub>レ</sub>知立並テ、矢倉ノ下ニモ雲霞ノ兵ノ並居タリ。海ニハ数千艘ノ儲船ウチタリケレバ、輒ク破ベシトモ不<sub>レ</sub>見ケリ。(長門本同)

とある。逆木樹のこと、矢倉をかいだこと、矢倉上に武装した兵がいたこと、鞍置き馬、海中深いところには船をかいだてにしたこと等、表現の一致度から見て、主たる材となつたのがここでも四部本（南都本）的本文であることは確かであろう。語り本の1は、元々は離れた箇所にあつた記事を切り継いで作られたものであり、時期尚早と思われる布陣の描写を含んでいるのもそのためだと考えられる。

引用は避けるが、2の六ヶ度軍に関しても、語り本の本文はおおよそ四部本に近いと言えそうである。ところが3の

正月廿九日、範頼・義経院参して、平家追討のために西国へ発向すべきよし奏聞しけるに、「本朝には神代よりつたはれる三の御宝あり。内侍所・神璽・宝剣これ也。相構て事ゆへなくかへしいれたてまつれ」と仰下さる。

に関しては、四部本・南都本には該当記事がない。両本は卷九冒頭で、木曾義仲に対して三種神器奪還命令が下されたことは記すものの、義経に対するそれは描かない。一方、延慶本は義仲への命令とは別に、

(1)廿九日、九郎義経イツシカ平家征伐ノ為ニ西国へ下向。義経院御所六条殿へ召テ仰ノ有ケルハ、「吾朝ニ神代ヨリ伝タル三ノ御宝アリ。即、神璽、宝剣、内侍所是也。相構々々、無<sub>二</sub>事故<sub>一</sub>都へ返入奉レ」トゾ被<sub>レ</sub>仰ケル。(長門本同)



と記す。すなわちここでは、語り本は明らかに延慶本(1)と共通の話を採用しているのである。そしてこれも引用は避けるが、4もまた延慶本に近い。だが11では、再び明確に四部本と重なってゆく。<sup>9)</sup>

《覚一本11》

源氏はあそこに陣とつて馬やすめ、こゝに陣とつて馬かひなどしけるほどにいそがず。平家の方には今やよするいまやよすると、やすい心もなかりけり。

《四部本11》

抑も平家の方には、「源氏は五日の晩方もや寄せん、六日の朝早くもや来ん」とて待ちけれども、七日の卯時に矢合なれば急がざりけり。源氏は此に陣を取りて馬を息め、彼に陣を取りて身を勞り、寄り合ひく談議しけり。<sup>10)</sup>

同じ箇所、延慶本は

(13)「軍ハ七日卯時ニ矢合有ベシ」ト被<sub>レ</sub>定。「義経ガ勢ノ中ニ、(人名省略)其勢七千余騎ハ義経ニ付ケ。残三千余騎ハ土肥次郎、田代冠者兩人大將軍トシテ山ノ手ヲ破給ヘ。我身ハ三草山ヲ打メグリテ、鴨越ヘ可<sub>レ</sub>向」トテ歩セケリ。(長門本同)

とあり、明らかに別種の表現なのである。第一節で述べた見通しのように、複数種の読み本系本文を語り本が切り貼りしているような様相が、これらの例から看取できるだろう。

三

戦いが開始された後の叙述にも目を向けて、同じことを確認してゆきたい。「一二の懸」から「落足」までの諸本の記事を、大まか

に整理しておく。

表2

覚一本	四部本	延慶本
A 一二の懸 B 二度の懸 C 坂落 D 生田森の平家勢の混乱 E 盛俊最期 F 忠度最期 G 重衡生捕 H 敦盛最期 I 業盛、経正、経俊、清房、清定ら最期 J 知章最期 K 師盛最期 L 通盛最期 N 一の谷落足	a 一二の懸 b 二度の懸 c 坂落（一） d 盛俊最期（一） e 生田森の平家勢の混乱 f 坂落（二） g 盛俊最期（二） h 重衡生捕 i 知章最期 j 忠度最期 k 師盛最期 l 敦盛最期 m 業盛最期 n 通盛最期 o 一の谷落足	(ア) 一二の懸 (イ) 二度の懸 (ウ) 坂落 (エ) 盛俊最期 (オ) 生田森の平家勢の混乱 (カ) 忠度最期 (キ) 重衡生捕 (ク) 知章最期 (ケ) 敦盛最期 (コ) 師盛最期 (サ) 通盛最期 (シ) 業盛最期 (ス) 一の谷落足

まずは次の部分から取り上げる。

〈覚一本B末〜C冒頭〉

B是を初て、秩父・足利・三浦・鎌倉、党には猪俣・兒玉・野井与・横山・にし党・都筑党・私の党の兵共、惣じて源平乱あひ、入  
かへく、名のりかへくおめきさけぶ声、山をひゞかし、馬の馳ちがふ音はいかつちの如し。るちがふる矢は雨のふるにことな

らず。手負をば肩にかけ、うしろへひきしりぞくもあり。うすでおふてた、かふもあり。いた手負て討死するものもあり。或はおしならべてくんでおち、さしちがへて死ぬるもあり、或はとつておさへて頸をかくもあり、かゝる、もあり、いづれひまありとも見えざりけり。

C かゝりしか共、源氏大手ばかりではかなふべしとも見えざりしに、九郎御曹司搦手にまはッて七日の明ぼのに、一谷のうしろ鴨越にうちあがり…

この傍線部は、延慶本(A)末尾の

サルホドニ西ノ渚ヨリ成田五郎卅騎計ニテ馳来ル。其ニ打ツギ、又五六十騎出来。熊谷是ヲミテ、「誰人ニテオワスルゾ」ト問ケレバ、「信乃国村上次郎判官代基国」ト名乗テヲメイテカク。是ヲ始トシテ秩父、足利、武田、吉田、三浦、鎌倉、小沢、横山、児玉、猪俣、野与、山口ノ党ノ者共、我ヲトラジト係入テ、源平両家、白ハタ赤ハタ相交リタルコソ面白ケレ。龍田山ノ秋暮、タナビク雲ニ不<sub>レ</sub>異。互ニ乱合テヲメキ叫ブ音、山ヲヒッカシ、馬ノハセチガフヲト如<sub>レ</sub>雷。組テ落者モアリ、落重ル者モアリ。源氏モ平氏モ、イヅレコソヒマ有トモミヘザリケレ。(長門本同)

という部分と重なっている。<sup>①</sup>熊谷・平山による「一二の懸」の活躍があつた後、続く者たちが参加して乱戦となつていった様子である。語り本はこれを、義経による坂落としての直前に移動させたのであろう。四部本や南都本に、傍線部の記述を見出すことはできない。ところが、坂落としての後の一節には、四部本との近似を認めなければならない。

〈覚一本C末〜D〉

C 村上の判官代康国が手より火を出し、平家の屋形、かり屋をみな焼払ふ。おりふし風ははげし、くろ煙おしかくれば、平氏の軍兵共余にあはてさはいで、若やたすかると前の海へぞおほく馳いりける。汀にはまうけ船いくらもありけれども、われさきにのら

うど、舟一艘には物具したる者共が四五百人、千人ばかりこみのらうに、なじかはよかるべき。汀よりわづかに三町ばかりおしいだひて、目のまへに大船三艘しづみにけり。其後は「よき人をばのす共、雑人共をばのすべからず」とて、太刀長刀でながせけり。かくする事とはしりながら、のせじとする船にとりつき、つかみつき、或はうでうちきられ、或はひぢうちおとされて、一谷の汀にあけになつてぞなみふしたる。能登守教経は、度々のいくさに一度もふかくせぬ人の、今度はいかゞおもはれけん、うす黒といふ馬にのり、西をさいてぞ落給ふ。播磨国明石浦より船に乘て、讃岐の八島へわたり給ひぬ。

D 大手にも浜の手にも、武蔵・相模の兵共、命もおしませめた、かふ。新中納言は東にむかつてた、かい給ふところに、山のそはよりよせける児玉党使者をたてまつて、「君は武蔵国司でまし候し間、是は児玉の者共が申候。御うしろをば御らん候はぬやらん」と申。新中納言以下の人々、うしろをかへりみ給へば、くろ煙おしかけたり。「あはや、西の手はやぶれにけるは」といふ程こそ久しけれ、とる物もとりあへず我さきにとぞ落行ける。

四部本eには、次のようにある。

源氏は熊谷・平山に一陣二陣を諍はせ、一谷は落とされて、村上判官代基国が手より、一谷の在家・飯屋に火を懸けたりければ、西風劇しく吹きて、黒煙東へ吹き懸けたり。生田の森の軍兵共、後ろを返り見ず防ぎ戦ふ処に、児玉党百騎計にて、山の傍嶮より寄せけり。新中納言は武蔵国の国司にて御在しましければ、皆見知り奉りて、使者を立て、「新中納言殿と見進らせ候ふ。此は児玉の者共にて候ふ。御後ろ御覧候はぬやらん」と申したりければ、中納言返り見たまへば西には黒煙押し懸けたり。「あはや、西の手は破れにけり。あれ見よ」と云ふ程こそ有りけれ、我先にと渚へ落ちにけり。渚には儲船共多かりければ、思ひ／＼に乗るべきに、乗らんと欲て、我先に船に取り付きける程に、物具したる者共、船一艘に一二千人込みて乗りければ、何れか沈まざるべき。目の前に大船二艘沈みて、一人も助からず。其の後は、宗との人共は力を合はせて乗するに、「次様の者共は乗すべからず」とて、取り付かんと欲けれども、太刀・劔を以て投げければ、肘打切られ、足打切られなんとて、敵に向かはず、御方に切られてぞ死にける。

南都本の場合、一連のものとと思われる記事を分断してしまっている四部本のような構成の乱れないが、傍線部・波線部は共有している。延慶本<sup>(オ)</sup>の

カヤウニ思々ニ戦ケルホドニ、源氏ニ村上判官代基国、平家ノ飯屋ニ火ヲカケタリケレバ、西風ハゲシクテ黒煙東ヘ吹覆テ、東ノ大手、生田森固タル軍兵是ヲ見テ、「今ハ何ニモ叶マジキ」トテ、船ニ乗ムトテ汀ニ向テ落ケレドモ、余ニ多クコミ乗タリケレバ、目ノ前ニ大船二艘ニヘ入タリ（長門本「のりしつめぬ」<sup>12</sup>）。「サテ可<sup>レ</sup>然人々ヲバノセ申ベシ。ツギノ人ヲバ乗ベカラズ」トテ、船ニヨリツク者ヲバ大刀長刀ニテナギケレバ、手打キラル、者モアリ、膝打ナガル、者モ有。カクハセラレケレドモ、敵ニ合テ死ムトハセザリケリ。何ニモシテ船ニ乗ムトゾシケル。御方打ニゾ多フ打レニケル。

と比較をしてみれば、語り本がいずれに拠っているかは明らかである。船は多くあった、なのに皆が一つの船に乗ろうとした、物具した武者、その数、どうして沈まないだろうか、などの表現が四部本と一致する上に、波線部の知盛に関する延慶本の叙述は、<sup>(ク)</sup>において彼の息子の知章の最期に繋がる形で描かれている点で、明確に異なっている。

#### 〈延慶本<sup>(ク)</sup>〉

新中納言知盛卿ハ武蔵国ノ国司ニテオワシケレバ、小玉覚見知タリケルニヤ、武者一騎馳来リ、「大将軍ニ申候。御後ヲ御覧候へ。今ハナニヲ御戦候ヤラム」ト申タリケレバ、中納言後ヲ返見給ヘバ、黒煙吹覆タリ。「大手ハスデニ破ニケリ」ト宣モアヘズ、我先ニト浜ヘ向テ馳給。船共ハ皆ヲキヘムケテコギ出ニケリ。アキレテゾオワシケル。打輪ノ旗サ、セタリケルハ児玉党ニヤ有ケム、三騎ヲメイテカ、ルヲ、新中納言ノ侍ニ監物太郎頼賢トテ、究竟ノ弓ノ上手ニテ有ケルガ、ヨクヒイテ射タリ。

そしてこの記述には不審な点がある。黒煙を見て大手の陥落を悟った知盛が「我先ニト浜ヘ向テ馳給」うたというのである。敬語によって明確に知盛の行動として描かれているが、この時点ですでに我が子すら眼中になく、自分が助かることだけを考えて我先に逃げたい

たというのだろうか。それでは、我が子を目の前で死なせた後に、兄宗盛を前にして自分一人が生き延びてしまった苦悩を語るあの述懐が台無しである上に、一般的に知られている知盛像とも大いに食い違ひだろうか。試みに延慶本の「われさき」の用例を集めてみると、この他には十五例。そのうち、「宇治川先陣」における佐々木・梶原についての例を除き、すべて不特定多数の集団の行動の描写に使われている。「宇治川先陣」は最初から二人だけが切り取られた異質な例と見れば、あとは右の知盛の場面だけが例外的な使われ方をしていることになる。おそらくは、四部本<sup>e</sup>や覚一本<sup>D</sup>のように不特定多数の兵の行動を描くのに使われていたことが、知盛の行為に転用された結果、不自然な形で残ってしまったのが、延慶本の本文なのだろう。前後は類似する長門本が、「我先ニト浜へ向テ馳給」ではなく「浜へ向きてあゆませ給」としているのは、如上の不自然さを嫌ったものと見なすことができる。知盛に関する延慶本(オ)の記述には、再編の跡を認めてよいだろう。坂落としの前とは異なり、ここでは語り本が延慶本の本文に拠っていると見ることはできないのである。

坂落としの場面自体は、語り本がいずれの読み本系の本文に近いのかは判定しにくいものである。だが、坂落としを挟む前と後ろの叙述において、前は延慶本、後ろは四部本と、近似本文の種類が入れ替わっていることが、明確に見て取れる。坂落とし前には、延慶本「一二の懸」の一部を用いて混戦と膠着を描き出し、坂落とし後には、平家軍の混乱を集中的に描いた四部本的な本文を配する。義経による果敢な作戦の実行こそが、戦局を大きく変えたのである。そのことを鮮明に劇的に描き出すために、語り本は複数の先行本文を効果的に切り貼りしているといえるのではないか。

#### 四

もう一箇所、Nの「落足」も見ておく。

#### 〈覚一本〉

凡そ東西の木戸口、時をうつす程也ければ、源平かずをつくるてうたれにけり。矢倉のまへ、逆も木のしたには、人馬のし、むら

山のごとし。一谷の小篠原、緑のいろをひきかへて、うす紅にぞ成にける。一谷・生田森、山のそは、海の汀にてゐられきられて死ぬるはしらず、源氏の方にきりかけらるゝ頸共二千余人也。今度うたれ給へるむねとの人々には、越前三位通盛・弟藏人大夫業盛・薩摩守忠度・武蔵守知章・備中守師盛・尾張守清定・淡路守清房・修理大夫経盛嫡子皇后宮亮経正・弟若狭守経俊・其弟大夫敦盛、以上十人とぞ聞えし。

いくさやぶれにければ、主上をはじめたてまつて、人々みな御船にめして出給ふ心のうちこそ悲しけれ。塩にひかれ、風に随て、紀伊路へおもむく船もあり。葦屋の沖に漕いでて、浪にゆらるゝ船もあり。或は須磨より明石の浦づたひ、泊さだめぬ梶枕、かたしく袖もしほれつゝ、朧にかすむ春の月、心をくだかぬ人ぞなき。或は淡路のせとを漕とをり、絵島が磯にたゞよへば、波路かすかに鳴わたり、友まよはせるさ夜千鳥、是もわが身のたぐひかな。行さき未いづくとも思ひ定めぬかとおぼしくて、一谷の奥にやすらふ舟もあり。か様に風にまかせ、浪に随て、浦々島々にたゞよへば、互に死生もしりがたし。国をしたがふる事も十四ヶ国、勢のつくことも十万余騎、都へちかづく事も纔に一日の道なれば、今度はさり共とたのもしう思はれけるに、一谷をも責おとされて、人々みな心ほそうぞなられる。

傍線部は、延慶本(ア)の末尾に

コ、ニテ平家ノ軍兵、数少ク被<sub>レ</sub>打ニケリ。一谷ノ北ノ小竹原ノ緑ノ葉モナクアケニゾ成ニケル。草木モ又人馬ノ肉トゾミヘシ。(長門本同)

とあるのに拠っている。<sup>(13)</sup> また、二重傍線部も延慶本(ス)の

可<sub>レ</sub>然人々ノ首、竹結渡テ取カケタリ。「千二百余人」トゾ注ケル。大將軍ニハ越前三位通盛、薩摩守忠度、但馬守経正、若狭守経俊、武蔵守知章、備中守師盛、藏人大夫業盛、大夫敦盛、已上八人。侍ニハ越中前司盛俊、筑前守家貞被<sub>レ</sub>討ニケリ。惣テ大將軍

ト覺シキ人十人トゾ聞ヘシ。但敦盛ノ頸ハナカリケリ。(中略)主上ヲ始奉、ムネトノ人々ハ御船ニ召テ、思々心々ニ出給。船路ノ習ノ哀サハ、塩ニ引レテ行ホドニ、葦屋ノ里ヲ馳スギテ紀伊地ヘ趣ク船モアリ、便ノ風ヲ待得ズシテ浪ニ漂フ舟モアリ。光源氏ニアラネドモ、阪磨ヨリ明石ヲ尋ツ、浦伝行舟モアリ。スグニ四国ヘ渡ル舟モアリ。鳴戸ノヲキヲ漕渡リ、未一谷ノヲキニ漂フ舟モアリ。カ、リシカバ島々浦々ハ多ケレドモ、互ニ死生ヲ知ガタシ。国ヲ靡ス事モ十三個国、勢ノ付従事モ十万余騎ニ及ベリ。都ヘモ一日路也。サリトモト思シ一谷モ被<sub>レ</sub>落ニケレバ、各心細ゾ被<sub>レ</sub>思ケル。(長門本同)

という記事を利用しているのであろう。一方で、波線部については、四部本の

凡そ一谷・生田の森・山の岸・海の渚にて、御方を討たれ、海に沈みて死ぬるは知らず、源氏の為に懸けらる、首二十余人なり。宗との人々には、門脇平中納言教盛の子息、越前三位通盛・舍弟藏人大夫業盛・但馬守経政・若狭守経俊・修理大夫経盛の最愛の末子、無官大夫敦盛・薩摩守忠度・左馬頭行盛・武蔵守知章・備中守師盛、侍には越中前司盛俊以下十人なり。此の外、本三位中将重衡は生き乍ら執られたまひぬ。(南都本類同)

との関連を指摘しなければならない<sup>14)</sup>(網掛け部は覚一本には見られないが、中院本・百二十句本と共通する)。読み本系諸本の中に散在する記述を寄せ集めるようにして語り本の本文が作られる、そのための素材となった本文は、現存読み本系のどれか一種に限定して考えることはできない。およそ四部本・南都本的本文と延慶本・長門本的本文の二種が利用されたと見ることができそうだという点において、右の「落足」の本文は、本稿が指摘してきた内容を端的に示す例である。

これらを踏まえてあらためて注目したいのが、「一二の懸」の箇所(表2のA・a・ア)である。その内容を細分化すれば、

- i 熊谷、平山の城戸口到着まで
- ii 熊谷、平山の奮戦
- iii その後の乱戦



のようになるであろう。この ii のうち、熊谷・平山の戦闘の描写に関して、語り本が四部本文を用いているであろうということは、かつて指摘したことがある。<sup>(15)</sup> 同じ ii で城戸に到着した熊谷が見た平家の陣容の描写が、語り本では表 1 の 1 にあたる記事に転用されていることは第二節に見た。iii に関しては延慶本的な本文が、一部は坂落としての直前に、一部は「落足」に利用されていた。引用はしないが、i のおよその内容も語り本は延慶本のほうに近いといえそうである。<sup>(16)</sup> 語り本を材として、何種かの読み本系本文が生み出されたという、本稿の想定と逆の方向を考えることは難しいだろう。複数の読み本系本文を断章取義的に切り貼りするという語り本の方法は、この「一二の懸」に注目することでさらにはつきりと見えてくるように思われる。

## 五

以上のことを踏まえて、最後に表 2 日の「敦盛最期」にも触れておきたい。覚一本の「敦盛最期」は、敗走した平家の公達が船へと逃げようとするのを狙って「よからう大將軍にくまばや」と相手を求めていた熊谷直実が、敦盛と出会うシーンから始まっている。相手の身なりからよい敵であることを察した熊谷は、敦盛に引き返すように告げ、敦盛もそれに応じてしまう。

熊谷「あれは大將軍とこそ見まいらせ候へ。まさなうも敵にうしろをみせさせ給ふものかな。かへさせ給へ」と扇をあけてまねきければ、招かれてとってかへす。

この一節は、延慶本に類似する場面を見いだせる。

熊谷二郎直実、渚ニ打立テ此ヲミテ、「アレハ大將軍トコソミ進候へ。マサナウモ候御後スガタカナ。返合給ヤ」トヨバイケレバ、イカゞ思給ケム、汀ヘムケテゾヲヨガセケル。(長門本同)

四部本や南都本では、いったんは馬で海を泳いで船を目指した敦盛が諦めて戻ってくるようになっていて、語り本とは異なっている。だが、敦盛が熊谷に組み敷かれる場面は、一転して四部本に近い。

〈四部本〉

海へ打入れたまひけれども、馬弱くて游がざりければ、力及ばずして引き返したまふ処に、熊谷次郎直実、「大將軍よ」と見ければ、追ひ懸けて渚にて押し並べ、会ひ积ひも無く、引き組みて落としつゝ、取りて押さへて首を昇かんと欲れば、十四五六計りなる若殿上人の、黒黒に薄気装せられける時なれば、「而ればこそ、大將軍よ」と思ひて、「誰にて渡らせたまふぞ」と問へども、余りに強く押さへられたりければ、且く物も言はず。「何かにく」と問はれければ、良久しく有りて、「態とは名乗るまじきぞ。疾くく首を取れ」と言へば、刀を差し中てんと欲すれども、目も暗れ、心も消えて更に当てられず。「此の殿は、我が子直家が季の程にこそ御在すらめ。子は誰も糸惜しき者なれば、今朝父母は物具して打出だされけん時に、何かに勞しく思ひたまひつらん。弓矢取る家に生まるゝこそ心憂けれ」と思ひ煩ひてぞ押さへける。

〈覚一本〉

我子の小次郎がよはひ程にて容顔まことに美麗也ければ、いづくに刀を立べしともおぼえず。「抑いかなる人にてまし候ぞ。なのらせ給へ、たすけまいらせん」と申せば、「汝はたそ」ととひ給ふ。「物そのもので候はね共、武蔵国住人、熊谷次郎直実」と名のり申。「さては、なんぢにあふてはなのるまじるぞ、なんぢがためにはよい敵ぞ。名のらずとも頸をとつて人にとへ。みしらふずるぞ」とぞの給ひける。熊谷「あッばれ大將軍や、此人一人うちたてまつたり共、まくべきいくさに勝べき様もなし。又うちたてまつらず共、勝べきいくさにまくることよもあらじ。小次郎がうす手負たるをだに、直実は心ぐるしうこそおもふに、此殿の父、うたれぬときいて、いかばかりかなげき給はんずらん、あはれ、たすけたてまつらばや」と思ひて、うしろをきつとみければ（中略。敦盛を討った後）「あはれ、弓矢とる身ほど口惜かりけるものはなし。武芸の家に生れずは、何とてかゝるうき目をばみるべき。なさけなうもちたてまつる物かな」とかきくどき、袖をかほにおしあててさめくゝとぞ泣るたる。良久うあつて、さてもあるべきならねば、よろい直垂をとつて、頸をつゝまんとしけるに、錦の袋にいれたる笛をぞ腰にさゝれたる。

共通句にアゝエの傍線を付したように、両者の表現には重なるところが多い。ウは覚一本には欠けているが、中院本に「熊谷、いとをしやこの人のちゝはゝの、いくさはにいたしたてゝ、いかばかりおほつかなくおもひ給らん」とあるのと関連するだろう。いずれも延慶本や長門本とは一致しないものである。語り本が依拠したと思われる本文の種類が入れ替わる、前節までに指摘してきたのと同じような現象がここにも見られるのだが、ここではその近似だけでなく、異質性にも注目しておきたいのである。

傍線部イで、敦盛は名乗りを求められ、身分差ゆえにそれを拒否している。これは南都本とも共通する<sup>17</sup>。だが、四部本や南都本において、やがて敦盛は、再度の求めに応じて名を明かすのに対して、語り本の敦盛は最後まで名乗らない。傍線部イが敦盛最後の言葉なのである。語り本の目指した表現を読み解いてゆこうとすると、この差違の意味は小さくない。中でも覚一本は、特に四部本と鮮明な対照をなし、新たに切り拓いた世界を明示しているように思われる。両者の対比を試みてみたい。

傍線部アでは、四部本でも覚一本でも、直実が敦盛を「大將軍」だと言っている。どちらにおいても、まず渚で敦盛を見つけたときに「大將軍」と言っていたから、傍線部アは直実の目に敦盛が「大將軍」と映ったという、二度目の表現である。だが、その二度目のほうの意味は、四部本と覚一本では明らかに異なっている。四部本では、思った通りのいい獲物だったという意味でしかないのに対して、覚一本では、敦盛の人柄への賞賛の言葉に変質しているからである。逃げずに引き返してきた潔さ、名乗りを拒否する上臈らしいふるまい、そういう存在と戦場で出会ってしまったことが、熊谷の心中に大きな変化を起こしているのである。二種の本文を取り合わせていたことが、まさにここにおいて大きな意味を持つものではなかったか。引き返してきた潔さ、殺すことをためらうほどの若さと美貌、組み敷かれてなお失われない「大將軍」の態度。敦盛の所作と姿を見るたびごとに、熊谷は、自分のような下級武士などとは違う何かを敦盛の中に見つけてゆくのである。しかも、名乗らぬままの敦盛を討ってしまった後にも、それは形となって直実の手に残されてしまった。「錦の袋にいれたる笛」である。それが直実を、それまで属していた世界から決定的に引き離してゆく。

「あなとおし、この暁城のうちにて管絃し給ひつるは、この人々にておはしけり。当時みかたに東国の勢なん万騎あるらめども、いくさの陣へ笛もつ人はよもあらじ。上臈は猶もやさしかりけり」とて、(中略)それよりしてこそ熊谷が発心のおもひはず、みけれ。

この、わずかな時間における熊谷心中の劇的なドラマは、多くの共通句を有していたはず四部本<sup>(18)</sup>も、また延慶本も描き得てはいない。覚一本が磨き上げた表現である。複数の本文を取り合わせて作られた語り本は、新たな世界を志向するものでもあったのである。その一つの到達点として、覚一本はある。そのことを、この敦盛最期の場面には見ておきたいと思う。

## 注

- (1) 引用は『屋代本高野本対照平家物語 三』（一九九三年、新典社）による。
- (2) 『平家物語の文学史』第二章第一節（二〇一二年、東京大学出版会。初出二〇一一年）。
- (3) 引用は『訓読四部合戦状本平家物語』（一九九五年、有精堂）による。
- (4) 引用は『校訂延慶本平家物語』（二〇〇〇～二〇〇九年、汲古書院）による。表記を一部あらためた。
- (5) 『四部合戦状本平家物語全釈巻九』（二〇〇六年、和泉書院）に指摘がある。
- (6) 『源平盛衰記』『源平闘諍録』は、四部本②よりは延慶本⑤に近い叙述を有するものの、語り本系諸本に受け継がれているはずの二重傍線部を欠く。本稿では、煩瑣を避けて以後この両書には言及しない。
- (7) 引用は『南都本平家物語下』（一九七二年、汲古書院）により、私に句読点を付した。
- (8) 引用は、『校訂中院本平家物語 下』（二〇一一年、三弥井書店）により、私に句読点を付した。
- (9) 『四部合戦状本平家物語全釈巻九』（二〇〇六年、和泉書院）に指摘がある。
- (10) 南都本には、「平家ハ源氏定テ五日ノ夕方モヨセンスラン、六日ノ朝モヤト相待トモヨセス。源氏ハ七日ノ卯時ノ矢合ト定テケレハ、急カサリケリ」とある。
- (11) 両者の類似については、『延慶本平家物語全注釈第五本』（二〇一五年、汲古書院）に指摘がある。
- (12) 引用は『長門本平家物語 四』（二〇〇六年、勉誠出版）による。
- (13) 『延慶本平家物語全注釈第五本』（二〇一五年、汲古書院）に指摘がある。
- (14) 『四部合戦状本平家物語全釈巻九』（二〇〇六年、和泉書院）に指摘がある。
- (15) 『平家物語』語り本の形成——「二之懸」を中心に——（『岐阜大学教育学部研究報告 人文科学』、二〇一三年一〇月）。
- (16) 語り本は記事は延慶本に比して簡略で、本文が重なるわけではないが、馬の様子や熊谷と平山の関係性の描写など、内容的に重なっている。

(17) 延慶本や長門本では、勲功に換えて供養するからと言われて、敦盛はすぐに名乗っている。

(18) 四部本にも傍線部エの表現があり、敦盛の死後に笛と巻物が直実の手に残されるが、それらを覚一本のように活かしているようには思われない。